シリーズⅥ　コダーイ・アプローチによる

第４回　福岡ソルフェージュ・合唱セミナー

陣内 直先生による「福岡ソルフェージュ・合唱セミナー」シリーズⅥ 第 4 回のご案内をいたします。第３回はコロナの感染拡大により、残念ながら中止となりましたが、引き続き、セミナーを再開いたします。より美しく豊かな響きを求める合唱のための講座です。清潔なイントネーションでうたうこと、お互いの声部を聴き合うことの大切さ、ソルミゼーション（移動ド唱法）でうたうことの意義など、コダーイのコンセプトを通して陣内 直先生よりご指導頂きます。　皆様のご参加を心よりお待ちしております。

シリーズ Ⅵ を通して歌う作品	
グレゴリオ聖歌	Ave Maria
G.P.da Palestrina	Ave Maria　（女声４声のための）
J.S.Bach	Messe in h より　Christe eleison
J.Brahms	Canon Nr.9 An's Auge des Liebsten ／Canon Nr.12 Wenn Kummer hätte zu tödten
Bárdos Lajos	Tavunga　「狩のうた」
福島雄次郎	「南島歌遊び」その１ 版画より「朝の祈り」／「収穫」

2022 年 11 月 12 日（土）・13 日（日）

第　4　回　　内　容	
J.S. Bach : Messe in h より Christe eleison ソプラノとアルトの２重唱	今回は、曲の終結部にかかるセクションを取り上げたい。この曲の中でも、転調が複雑で、歌っていて迷子になりやすい部分である。ヒントとして「歌の楽譜にとらわれず、広くオーケストラ部分も見る」ということがあると思う。練習として、器楽の旋律も出来るだけたくさん歌ってみたい。歌の旋律とどう違うのか、歌の旋律とどう関わるのかなど、たくさんの発見があると思う。
G.P.da Palestrina： Ave Maria　（女声４声）	ルネサンスの曲を歌うにあたり、協和音をしっかりハモらせるというのは、良く練習してきたし、皆さん納得のことと思う。しかし音楽のエネルギーが最大になるのは、不協和音の部分で、そこにこそ歌のテクニックもソルフェージュの知識も発揮されればと思っている。不協和音がどのように準備されるか、ぶつかる音程がどのように響くか、そしてそれがどのように解決されるかなど、たくさんの課題を含む問題である。前回は「掛留」についてお話しした。今回はもう少し詳しくその仕組みと成り立ち、そして掛留を表現するテクニックについて、掘り下げたい。
福島雄次郎：「収穫」	大好きな福島先生の作品に取り組めることを、心から嬉しく思っている。この作品の素晴らしいポイントのひとつは、さまざまなポリフォニーが駆使されていること。今回はその内の、とくにリズムに注目したいと思う。楽譜に書かれた拍子とは違う拍節が、譜面上から読み取れることに注目したい。「小節は重なるが拍節は重ならない」という音楽を、楽しみたいと思う。
Bárdos Lajos： Tavunga　「狩のうた」	譜面を見ると、20 世紀の現代音楽ふうに、複雑で難しそうに見えるが、分析をもとにソルミゼーションで読んでいけば、さほど読みにくい曲ではないということが分かるだろうと思う。ソルミゼーションも分析も、楽しい演奏のための道具として活用したい。

主 催 ： 福岡 ソルフェージュ・合唱セミナー実行委員会